

令和元年度 第2回窪田空穂記念館運営委員会 会議概要

- 1 日時 令和元年11月14日(木) 午後1時30分～3時
- 2 会場 窪田空穂生家
- 3 出席者
 - (1) 委員側
折井理智子委員、上條宏之委員、上條昌明委員、窪田武夫委員
坂口登美子委員、松本久憲委員、渡邊正明委員 7名
※欠席：来嶋靖生委員、篠弘委員 2名
 - (2) 市側
木下博物館長、山村事業担当係長、勝野分館長、谷口（学芸員）、神田（庶務係）
- 4 令和元年度中間事業報告
 - (1) 短歌講座について
ア 幾分、新しい参加者が増えてきているのか。(委員長)
→ 新しい方の参加はある。一方で、高齢で参加できなくなる方もいる。(分館長)
 - (2) 空穂生家こども教室
ア 囲碁に比べて将棋の方が大勢参加しているようだが。(委員長)
→ 将棋は共催の塩尻支部が熱心に活動してくれている。こちらの教室に参加している子どもたちが、大きな大会でよい成績を残している。この教室をひとつの大事な場所として考えてくれている。(分館長)
 - (3) 企画展について
ア 元号との関係で万葉集に対する関心が深まった年だったが、企画展を見に来られた方はどんな感じだったか。(委員長)
→ とてもよかったと、お褒めの言葉をいただいている。小学生、中学生も見学に来るので、分かるようにという思いで展示をつくった。子どもたちも熱心に見てくれた。(学芸員)
イ 講演会、来場者が少ないのでは。(委員長)
→ 台風の影響があったのではないか。中央線が停まるなどし、講師の内藤先生も長野まわりで松本に入っていた。体調を崩されたと欠席されたかたも数名いた。(分館長)
 - (4) 子どもの短歌について
ア 子どもの短歌もだいぶ定着したが、小学校との交流で芝沢とか菅野の小学校はたくさん応募してくれるのか。(委員長)

→ 窪田空穂先生、章一郎先生作詞の校歌の学校は、必ず出してくれる。係の先生が変わってしまうと、途切れてしまう学校があるのが残念。(分館長)

イ 校長先生のご意見は。

→ 1年生と3年生は必ず、交流させていただいている。和田・新村の子ども達にとっては窪田空穂先生の名前は地域に結びついている。自分たちの土地の誇りとして捉えられていると思うし。また失わないように話していかないといけないと思っている。芝沢小学校には、空穂先生が贈ってくださった万葉集評釈の初版があり、「令和」を万葉集からとったという事で先生たちに紹介をした。そんな事からも空穂先生の業績の偉大さを感じる年だった。(委員)

→ 小さい子ども達の感性はすごいと思う。博物館が歩いて行ける場所にあるようになれば、とても良い環境になると感じている。今新しい文化が教育の世界に入ってきているが、足元がしっかり地べたについて、そこからではないかと感じている。その様な意味では市に博物館があるという事は、非常に有難いと思っているし、残していただきたいと思っている。(委員)

(5) 松本大学との連携

ア 松本大学との新しい連携の新しいあり方について(委員長)

→ 先生方との個人的な繋がりでもたせているところがある。運営委員になっていただくなど人を引き込んでいく事も大事かと考えている。(分館長)

(5) 教育研修について

ア 研修がなくなった事について(委員長)

→ 市内の各施設を研修場所として行う研修自体が今年から無くなってしまった。自己研修になってしまうと、やらなかったら無くなってしまう。大事な活動だと思っているし、なくなると学校と博物館との繋がりが薄くなってしまふ、弱まっていくと危惧している。(博物館長)

→ 研修を無くさないで他をなくす余裕があるとよいですね。(委員長)

→ 教育には、学校教育、社会教育、家庭教育の3つがあり、その中の家庭教育が今、学校が背負わなければいけないという事が一番の問題になっている。見直す世の中になっていけばと思っている。(博物館長)

(7) 和田地区芸術文化祭について

ア 空穂さんは地域の人たちの身近な存在では無くなってしまったのか。(委員長)

→ 段々と身近な存在では無くなってきている。隣近所で空穂さんを知らないという人が増えてきた。日常ちょっとしたきっかけに短歌を読むという事が地元に根づいていけばいいなと思っている。(委員)

→ 和田は歴史的に短歌が盛んな所だった。段々短歌を詠むというのが生活の中から失われつつある。今年、公民館で小中学生にもわかる地域テキストを作成する事になって、その冒頭には空穂さんの地域を詠った短歌を載せるという事になって

いるので、学校配布で皆に渡れば空穂さんへの関心が高まるかもしれない。(委員長)

(8) 施設・設備管理について

ア バスが入ってきても大丈夫なように、駐車場の枝を剪定してもらったのはとても良かった。(委員)

5 令和2年度事業計画

(1) 共済事業・地域や学校との交流について

ア 松本市は、まるごと博物館構想という事もあり、たくさんの博物館があるが、空穂記念館はどのような位置付けになっているか。(委員長)

→ 松本市の博物館は特なもの、博物館の文化財として保有しています。それぞれにテーマを決めて、ここは窪田空穂を中心に文学を扱っている施設になる。松本市のすべての所に利用者が好みにあった博物館があるという事は出来ないが、地域の個性、特徴を生かした配置にされている。博物館に行くきっかけをつくっていただき、それから勉強をしたい学びたい分野の博物館などに足をのばしていただくなど、うまく機能できないかと考えている。公民館ともタイアップをしながら、博物館の建物だけでなく、その周辺にも学びの輪を広げるという事で、それぞれの地区、分館に配置されている学芸員等の職員が活動できれば機能していくのではないかと考えている。(博物館長)

イ 長い間の空穂記念館の運営の中で、最近の特徴は小中学校、大学との連携は進んでいるが地域住民、市民とのネットワークをどのように進めていくか、相変わらずの課題だと思う。(委員長)

→ 市民学芸員という制度をしばらくお休みしていたが、昨年からまた開始した。市民学芸員が分館も含めた博物館で活動する、一般市民の皆さんと博物館を繋げていく、その様なことを今、考えている。(博物館長)

(2) その他

ア 今の子ども達は、見たり聞いたりだけでは駄目。実際に体験してみる、何かを作ってみる、記念館でしたら学芸員の方が簡単な短歌を教え作ってお土産に持って帰ってもらう、お茶を経験するなど子ども達が体験しながら博物館を楽しむ。空穂さんの功績などは小学生には難しい部分があるので、少し短歌に触れてみる、日本の文化に触れてみる、そのような事が経験できる施設がいいのかなと感じている。(委員)

イ 人が思いを寄せてもらえない物は失われていってしまうのは宿命。和田の、この土地で大事な物をどのように繋いでいき、人の心に残していくのかを考えていかなければいけない。大事な物は自然と残ると思う。例えば松本城無しで自分の生まれたところ松本市を、他県の方に語るというのは難しい。和田地区も欠くことの出来ない大事なものの、何か皆で共通に認識しあって大事にしていこうという事が必要。(委員)

ウ 早稲田大学と空穂さんとの関係が今も続いているのであれば、そこも中央と繋がるルートだと思う。早稲田大学が記念館の事を大事に考えてくれれば、何か出来る切り口になるのではないか。(委員)

エ 今の子ども達は、松本の短歌、記念館へ学習の一環として学びに來たりして小さいころから空穂さんに触れる機会がある。大人になった時どのような形で記憶に残っているのか期待したい、小さい時の経験はすごく心に残ると思うので、これからは是非触れる機会を多くとっていただきたい。(委員)